

熊本県 I P M実践指標【大豆】

| 時期 | 管理項目 | 管理ポイント | |
|---------|---------|---|--|
| 播種前 | 種子選定 | 品種選定 | 作型や品種特性を考慮し、地域で栽培可能な品種を選択する。 |
| | | 健全種子の利用 | 採種ほで生産された種子等、病害虫に汚染されていない種子を使用する。 |
| | | 種子消毒 | 農薬の使用方法を遵守して、塗沫処理または粉衣処理による種子消毒を行う。 |
| | ほ場準備 | 連作の回避 | 輪作または田畑輪換により連作障害を回避し、土壌伝染性病害が発生したほ場での連作は行わない。 |
| | | 伝染源の除去 | ウイルス病の感染を防ぐため、伝染源となる雑草（クローバ科、マメ科、ナス科植物）を除去する。 |
| | | 雑草対策 | ほ場周辺の雑草除去を行い、害虫密度を低下させる。 |
| | | 排水対策 | 弾丸暗きよや排水溝等の対策により湿害を回避する。 |
| | | ハト害対策 | 集団で作付するとともに播種時期を統一する。 |
| | | 土作り | 土壌分析の結果に基づき、深耕や有機質・土壌改良材の施用を行う。ただし、未熟な有機物はタネバエの被害につながるのを避ける。 |
| | | 施肥 | 過剰施肥を抑え、品種の特性・病害虫の発生・倒伏の発生等を考慮した適正な基肥施用量としている。 |
| 播種時 | 播種 | 適正な植栽密度で播種する。 | |
| | 湿害対策 | 畝たて播種とする。 | |
| 生育期 | ほ場管理 | 排水対策 | 額縁排水、基幹排水溝を設置し、排水を良くする。 |
| | | 中耕・培土 | 紫斑病の対策として、大豆の3葉期および5葉期に、中耕・培土を行う。 |
| | | 雑草管理 | 雑草対策として発生状況を確認し、適期に適正な回数を行圃場周辺での害虫の発生及び圃場への飛び込みを減らすため、畦畔及び圃場周辺の雑草地の除草を行う。 |
| | | 適正な追肥及び中耕 | 窒素質肥料の多用を避け、追肥は生育や病害虫の発生状況に応じて適切な時期・量で行う。 |
| | 防除要否の判断 | 発生予察情報の利用 | 病害虫防除所が発表する発生予察情報入手する。 |
| | | ほ場の見回り | 定期的にはほ場を見回り、病害虫の発生や被害を把握する。 |
| | | ハスモンヨトウ対策 | 地域ごとにフェロモントラップの設置により、ハスモンヨトウなどの発生状況を把握する。 |
| | 病害虫防除 | 周辺雑草の除去 | 病害虫の発生を軽減するために、適切な時期にほ場周辺の除草を行う。 |
| | | 物理的防除 | ハスモンヨトウ対策として、白変葉の除去を行う。 |
| | | 防除 | 必要以上の散布とならないように、農薬の使用量・散布方法を決める。 |
| | | 農薬の選定 | ハスモンヨトウを対象とした防除の際は、若齢幼虫期に薬剤を散布する。 天敵に影響の少ない薬剤を選択する。 |
| | | 農薬飛散防止対策 | 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。 飛散しにくい剤系（粒剤または微粒剤）や散布ノズルを選定するとともに、十分な飛散防止対策（風向き、散布方法等）を行う。農薬散布は、無風～弱風時に飛散が少ない散布器具を使用するなど、他の作物などに飛散しないように、適切な飛散防止策を講じる。 |
| | 収穫後 | 罹病残渣の処理 | 収穫後早めに、トラクター等にて収穫残渣や雑草を地中深くすき込む。 |
| | 全般 | 農薬の保管 | 農薬は鍵のかかる保管庫で適切な管理を行う。 |
| 作業日誌 | | 各作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の名称、使用時期、使用量、散布方法等栽培管理状況を記録する。 | |
| 研修会への参加 | | 県や農業協同組合が開催する I P M研修会等に参加し、情報収集に努める。 | |